

野口健氏講演会

目標をもって生きる事の素晴らしさ

野口氏は、エベレストなどの7大陸最高峰登頂において世界最年少記録を樹立するなど数々の実績を持つ。それにとどまらずエベレストや富士山における清掃活動も続けている。講演では、登山に至るいきさつ、そして聴いているだけで、凍りつくような過酷なまでの現場の様子を、時にユーモアも交えて語られた。

● 植村直己の言葉に突き動かされて

講演に先立って登山時の野口氏のビデオ上映。続いて講演が始まり、自らの目標が見えなかった高校生時代。外交官の父親から「旅に出て考えてみる」とアドバイスを受ける。旅先の本屋の店先で、冒険家で国民栄誉賞を受賞した植村直己氏の著書に出会った時、こんな自己実現の方法、生き方があるのかと、思いがけない啓示を受ける。

登山を始めると若くして、モンブラ



野口 健氏

● 登頂か下山かの葛藤

ン、キリマンジャロの登頂に成功、脚光をあびた。しかし、そこに至る資金は親が出したのではないか。資金作りからはじめて、「なんぼのもの」ではないのか。そこから、企画書をもって訪問した企業は136社。門前払いの連続、応対してくれなかった企業はあっても、厳しい社会に生きていくには通用しない。協力企業が出るまでのプロセスが、すべて腑に落ち、ビジネスパーソンにも通じる話であった。

そして、初めてエベレスト登頂に挑もうとしても、どうも乗り気になれず、登山はキャンセルすることに。そのとき国際隊は全滅。スポンサーには訳にならない訳を言ったものの、2回目のチャレンジのときも、登頂にチャレンジするか、やめるかで悩む。しかし、やめるのが2回目となると、スポンサーのことを思うにつけ、悩みは極限状態に。野口氏は下山を選ぶが、友人は決行し遭難。手足の指の多くを失った。



登頂時の映像

生きるか死ぬか、登頂か下山か。迷った末に、登ると決めた時のエクスタシーは何事にも代えられないと言う。しかし、「気持ち切れる人は死んでいく」という野口氏の言葉は重い。

そこで語られるのは何をもっての「成功」か一概には言えないというもの。とんでもない悪天候の中では、正しい判断をして、アタックを止めて下山する。それも「成功」と言えるかもしれない。登頂の成功率は3割、失敗7割と言われる。若さ・勢い・運が揃うと、時に実力以上の結果が出るのだが、これだけでは生き抜けない。3回目ようやく登頂に成功するが、一連の出来事の教訓として、一気に進めたものは、一気に崩れる。

なにがなんでもと一気に崩れにいくより、小さな物事をコツコツと進め、人生トータルで考えていけばいいのでは、とは死の淵を覗いた登山家・野口健氏の言葉だ。

(文責/本誌編集部)
令和元年7月10日
於/ハイアットリージェンシー東京

講演会の後、多くの感想をいただきました。以下に抜粋して掲載いたします。

- ・野口氏のお話とご経験に魅了されました。あきらめない心、勇気を兼ね備えたエネルギッシュなステキな方です。
- ・学生のときに野口さんの講演を聞いて以来、久しぶりにお会いすることができ、うれしく思う。
- ・所詮は登山家のエリートと思っていたが、そうではないことに驚かされた。
- ・自分の人生でおよそ経験したことのない話ばかりを、お伺いすることができた。
- ・極限を経験されているので、軽口で語っていても奥が深く重みを感じた。
- ・生と死が想像以上にシビアだったこと、苦境でもよく考察し、切り開いてきた生き様が深く印象に残った。
- ・失敗から学ぶ大切さ、気づきを学んだ。
- ・講演のテーマを超えたお話に聞き入った。
- ・最終的に人生トータルでプラスになればいいと考えると、楽に生きられると思った。

のぐち けん 氏

●略歴/1973年、米国ボストン生まれ。1999年3度目の挑戦で、エベレスト登頂に成功し、7大陸最高峰登頂に成功し、世界最年少記録を25歳で樹立。



その後、富士清掃登山を開始。環境問題を担う人材育成のほか、戦没者遺骨収集、熊本地震テントプロジェクトなどの社会活動。